

妻の語録と私の独り言

片山  
力

## はじめに

私は今年72歳になるが、これまでの生きてきた人生の3分の1に当たる24年間は母の庇護の下に育った。私は子供の頃は体が小さく、性格はおとなしく引込み思案であったことと末子であったために母親に甘やかされて育った。大学も4年の卒業時に就職できず2つの専門課程を修了し6年も行くことになったが、アルバイトで学資を稼ぐ甲斐性もなく、全て母が家計の苦しい中で、家族の反対も押し切り捻出してくれた仕送りで社会人になった。社会人になった4年後に真智子と結婚し、人生の約3分の2に当たる43年間生きてきた。

私は大学を卒業するまでは勉強一筋で、特に大学受験を控えた高校時代は俗に言う「ガリ勉」で多感な青春を灰色で過ごした。社会人になってからは、会社人間になった。私の年代では仕事が生きがいのように仕事に没頭する人も多かったが、私も人後に落ちない会社人間であった。私は会社人間といっても、仕事が捌けて、多くの業務をこなしたわけではない。むしろその逆で、仕事が捌けず、非効率のためであり、学生時代の「ガリ勉」の形を変えた、体制順応型の不器用な努力人間であった。競馬馬のように横を見ないように目隠しをされ、ひたすら会社の業務方針に向かって走った感がある。そうすることによってやっと人並の仕事が出来たため、いわば会社中毒片輪人間であった。

その結果、幸運といふべきか曲がりなりにも72歳まで働く仕事を得られた。私はこれまで何とか生きてこられたのは自分が頑張った実力と思っていたが、冷静に考えると、社会人になるまでは、全く母の庇護の下に成長し、社会人になって結婚してからは、総て、真智子の支えによるものであったことを真智子がいなくなってしまうと感じるようになった。

真智子は、私の仕事中毒を支えるために、一家としての仕事一切を取り仕切った。毎日の食事から始まる家事一般のことは勿論、子供の養育、住宅の選定など社会人としての役割を、真智子の判断と決断により処理してきた。

そのような真智子への依頼心が、真智子がC型肝炎に罹患したときは勿論、2回の癌の手術後も、真智子がいなくなることなど考えたことがなかった。しかし、平成20年6月に、肝臓癌手術をした主治医より真智子は余命3ヶ月といわれ、更にその直後に肝臓破裂により緊急入院し僅か2週間後に私に何も言わずに残すことなく逝ってしまった。

私を育て、一人前の人間になるまで庇護してくれた母は95歳で天寿を全うするまで呆けもせず元気に生き抜いた。私は傍にいて親孝行することは出来なかったが、母は生前、「親に迷惑を掛けないで一人前の人間になればそれが親孝行だよ」と言っていたので、母が長生き出来たこともあり、私も最低限の恩返しが出来たものと思っている。

一方、私の人生の約3分の2を支え続けた妻真智子には、私から満足のいく何かを与えたであろうかと思うとき、私が真剣に真智子に「もっと生きてもらわねば困る」と言う気持を持ったのは死別する最後の2週間である。私は今までに対応したことのない忙しさの中で、この2週間の間、真智子の看病を

したつもりである。いや、看病と言うのはおこがましく、毎日、病状の進行に心を痛めながら通院し、具体的な支援もできず看取っただけのことであるが、何も対策が打てない自分に自責と後悔が残り、真智子にお返しするものは2週間の気持だけではあまりにも少ないのではないかと思うのである。

真智子は生前、「お父さんは、後悔ばかりする人で、先は見えない人だから」とよく言っていた。真智子がいなくなつて、私は会社人間を辞めたが誠につまらない寂しい日を過ごすことになつた。こんな気持になるのだつたら、「どうしてもつと真剣に肝臓対策を勉強し、真智子と苦しみを共有できなかったのだろうか」と真智子がよく言っていたように後悔が始まつた。ここにこの後悔と自責の念の整理として、真智子との思い出をまとまりもなく綴つてみた。これを多少なりとも真智子への恩返しとしたい気持である。

真智子は寡黙の方であつたので特別必要のないことはあまり喋ることはしなかつた。しかし、口数が少ない分、口に出したときには真実がありまた重みがあつた。真智子がいなくなつて思うことは、真智子がそれほど注意して口に出したとは思われない言葉でも私には強い印象がある。真智子の言葉を思い出して、それらが如何に正鵠を得ていたかに驚く。それらの言葉を語録としてまとめた。しかし、私がその思い出を話してももう真智子はそれを聴いてくれることはない。その気持を表すために「妻の語録と私の独り言」のタイトルとした。

第1章は、私が真に真智子との別れを意識した2週間の看護と百日際で真智子の遺骨を墓石に納める

までの私の行動記録である。他人から見れば誠にたわいのない行動にすぎないが、私にはこの間の行動が真智子に対する想いがこもり忘れられないのである。

第2章は、元氣な真智子がC型肝炎に罹患し、肝硬変から遂に癌の発生となり2回のラジオ波焼灼治療に至る過程とラジオ波焼灼治療にたいする疑問および反省の記録である。再発した2回目の癌は直径2cm程度でラジオ波焼灼治療で除去したはずであるのに、手術後僅か1ヶ月で、何故手術不能まで進んだのであろうか、と疑問をもち、真智子の死後データを整理し、10年間も対応していたいただいたデルタクリニックの日野医師とラジオ波焼灼治療にあつた武蔵野赤十字病院の泉医師（現副院長）に質問し、回答を頂いた内容である。

第3章は、真智子との出会いから、43年の間生活をともにしてきた思い出の記録である。真智子は口数は少なかつたが、それだけに発した言葉には重みがあり、後から思い出してみると教えられることが多い、私の反省記録でもある。この拙文の標題とした「妻の語録と私の独り言」の内容である。

第4章は、私が社会人として自立するまでは母に負んぶされて育つた精神状態であつたが、その感覚の残る幼少のときの思い出と、生前はあまり恩を感じなかつた父の生き方と私の気持の変化を記した。

第5章は、社会人になつてからの私の趣味を通して私の行動の一端を示し、私は自分中心に楽しんだが、真智子にとっては家庭生活を味気なくしていたかも知れない実体について記した。

そして、第6章は、真智子のいない毎日が現実となり、如何に真智子に依存して生きていたか、そのくせ如何に無神経であつたかを反省するために、癌で苦しむ人達の作品と同時に、私と同じ境遇の「夫」

が「妻」を「癌」で亡くした体験談を探して読むことを試みた。これを追悼読と名付けて、自分の行動と比較しながら、真智子への追悼の気持を整理したものである。

平成21年7月19日 真智子1年祭の日

もくじ

## 目次

はじめに	4
第1章 真智子の看護記録とわが家の神となる日まで	11
1. 余命3ヶ月も裏切られた病状の急激な悪化	12
2. 肝臓癌破裂による緊急入院	19
3. 奇跡の回復の期待	27
4. 絶望と無言の帰宅	40
5. 葬儀と最後の別れ	57
6. 秋山耐子さんの逝去	60
7. 五十日祭まで	64
8. 百日祭までと惜別の詞	72
第2章 C型肝炎の罹患、癌手術とその反省	83
1. C型肝炎の罹患	84
2. インターフェロンの治療	87
3. ラジオ波焼灼治療	89
4. 2回目のラジオ波焼灼治療	93
5. 2回目ラジオ波焼灼治療後の真智子の行動追跡	97
6. 病状経過の整理と医師との質疑応答	101
第3章 真智子語録の反省	119
1. 真智子との出会と結婚	120
2. 真智子の趣味と思い出	124
3. 真智子の友人と感謝	142
4. 真智子の語録	147
第4章 私の生立と両親の思い出	175
1. 私の生立	176
2. 母の思い出	194
3. 父への想いとその変化	201
第5章 私の趣味と生き様	217
1. 囲碁の実力	218
2. マージャンと運命	228
3. 将棋との付合	233
4. 努力に報いるゴルフ	237

## 第6章

### 追悼読

5. 英会話と才能	242
6. 真智子に足りないねばり力	248
1. 最近話題となった作品	254
2. 癌という病気の真実を教えられた作品	257
3. 感動および反省させられた作品	266
4. 癌に関する作品の特徴	273
5. 追悼読から得た後悔と反省	278
おわりに	281
あとがき	284

# 第1章

真智子の看護記録とわが家の神となる日まで

## 1. 余命3ヶ月も裏切られた病状の急激な悪化

私の妻、真智子は今年66歳になった。真智子がC型肝炎に罹患していることが約15年前の平成6年に市内の上福岡総合病院で確認された。真智子は当初は上福岡総合病院で注射治療を行っていたが、施設も充実し癌治療病院でも実績のあるわが家から30分程度で行ける板橋の日大付属病院に変更し通院していた。その後、真智子は肝炎患者の団体である「しらすぎ」に入会し、その情報から、肝臓医師として著名で人気がある日野医師が開院している「デルタクリニック」という肝臓専門の治療所があることを知った。そこで平成10年よりこのデルタクリニックに通院し超音波診断、ウルソなどの肝機能保持の注射、薬を処方してもらっていた。デルタクリニックは所沢にあり、週3回の通院を始めた。最初は電車、バスを乗り継いで1時間以上も掛かったが、6年前に日産サニーを購入してから自分で運転し約40分程度で行けるようになった。

デルタクリニックの日野医師は有名であったためか医学上のトラブルがあり、訴訟問題が起き、平成18年に診療中止処分をうけた。そのため自分の恩師である北海道の同じ肝臓の専門医師である松島医師に院長を委託している。松島医師は北海道の病院と兼務になっており、デルタクリニックで診察する日は、月曜日、水曜日の週2回である。デルタクリニックの日野医師の診療中止処分は平成21年4月が解除されたが、それまでは日野医師は非公式にデルタクリニックに来る患者の相談に乗ったり、患者の力

ルテは見ていたとのことである。

真智子はこのデルタクリニックに10年間通院し治療していたが、この間に病状はC型肝炎から肝硬変に進行し、そして遂に平成18年9月に癌が発生した。最近の肝臓癌治療法の一つとして、癌の切除手術でなく、ラジオ波で癌細胞を焼き殺す、ラジオ波焼灼治療法がある。この方法は、体を切開しないので、体への負荷が小さく、いわゆる低侵襲治療法として注目され希望者が多い。肝臓癌治療でそのラジオ波焼灼治療法の実績の多い病院の一つとして東京都武蔵野市境にある武蔵野赤十字病院がある。この病院では泉並木医師（現副院長）がラジオ波焼灼治療医師として著名である。

デルタクリニックの日野医師の紹介で、真智子は武蔵野赤十字病院で、その著名な医師である泉医師の治療を受けた。ラジオ波焼灼治療法は低侵襲治療法であるが、問題点はやはり目で見ないために完全に除去することが難しく、再発の可能性が高いと言われている。果して、真智子は最初のラジオ波焼灼治療の1年半後の平成20年5月に再発し、同じ病院で治療したが、2回目は若い北海医師（仮名）が主治医であった。

真智子は何事も人に頼らず自分ひとりで処理する性格であったために、病状についても夫である私に特別なことがない限り協力を求めることはなかった。最初の平成18年9月に発見された肝臓癌の告知も、本人から状況を私が聞く有様であった。そして、平成20年5月に肝臓癌が再発し、2回目の発生についても真智子より聞いた。

一方、私は、全くの会社人間で、今年72歳になるが、この年になるまで働いている。会社では私は仕

事が生きがいのように見られているが、自分では必ずしも好きというほどではない。しかし、この厳しい時代に仕事が継続できるだけでも幸運であると同時に、多少なりとも社会と係わりを持つことに幸せと自負が持てる。そして何よりもボランティアなみの安月給ではあるが経済的に大きな支えとなることは確かである。

真智子は2回目の手術をした後は回復が遅く元気がなかった。武蔵野赤十字病院では、その後の経過を見るために、6月始めに実施したCT検査の他に、造影MRI検査を行い、6月27日(金)には主治医から経過説明を受けることになった。

6月27日(金)には、私の会社の社長交代の歡送迎会を行うことになっていたが、私は幸い6月末で調査報告書を提出し、仕事が一段落したこともあって、この度は主治医から真智子の病状の経過説明に付合うことにした。

以下、6月27日(金)から、真智子が最後に息を引き取った7月16日(水)までを日記風に、私の行動と私の心の動きを記した。

#### 6月27日(金)

10時から主治医の北海医師から説明を受ける予定になっていたので、8時頃ふじみ野の自宅を出た。武蔵野赤十字病院には東武東上線から武蔵野線へそしてJR中央線に乗り継いで約1時間半程度で行ける。この日は東武東上線の朝霞台駅から本数の少ないJR武蔵野線への連絡がよく、武蔵野赤十字病院

にはかなり早く着いた。10時に医師の報告を受けるべく待合室で順番のボードをみていたが、前の患者の状況が悪いのか、私達の順番はかなり遅れ、予定時刻はかなり過ぎていた。

いよいよ私達の順番となり、私達が入室と同時に、北海医師は直ちに沈痛な面持ちで単刀直入に言われた。「片山さんの病状は非常に進行している。癌が肝臓の約3分の2まで広がり、最早手術はできない状況です。出来るだけ早く入院して、化学療法の抗癌剤治療を行った方がよいと思われませんがどうしますか」と告げられた。私は勿論、冷静な真智子もショックを受けて、どう答えるべきか、一瞬言葉が出なかった。5月に手術をして除去したはずの癌がどうして、1ヶ月位で手術不能まで進行するのだろうか。手術から20日程度しかたっていない6月中旬にCT検査を受けたときには、それほど深刻な状況とは聞いていなかった。手術直後のCT検査の説明を受けたとき、除去した癌周辺がわずかにリングのように残っていたが、やはり完全に除去できなかったのであるか、手術ミス、或いは、診断ミスではないのか、そうでなければ1ヶ月位でそんなに進行するはずはないと思えるからである。しかし、そんなことを今更言っても仕方がない。

私は、「この進行状況はどう判断したらよいのでしょうか、今後の治療方法はどのようなのでしょうか」と質問した。北海医師は、「私も進行が早いのに驚いている。抗癌剤治療の方法はいろいろあるので、入院後、状況を見て決めることになりました」と言われる。私は「それで良くなるのでしょうか」と質問した。北海医師は、「この状況であれば、5年生存率は2〜3割と考えて下さい」と言われた。私は真智子の前でこのような質問をしたことを悔いた。

暫らくして、真智子は「それが最善であるなら、直ちに入院しますのでお願い致します」と答えた。北海医師は直ちに携帯電話から、ベッドの空状況を確認した。一番早い日で7月14日であるとのことである。私達は「もっと早く出来ませんか」とお願いしたが、北海医師は、「それまでベッドが空かないから仕方ありません」と言われた。1日でも早く治療してもらいたいのには2週間先しか空かないのか、と思い、私は「他の病院でも駄目でしょうか」と聞いた。北海医師は「他の病院を希望するなら紹介しますが、他の病院では最初から検査をやり直しますから、結果的にはあまり変わりないか、かえって遅くなることも考えられます」と言う。そう言われればそうかも知れない。これ以上は私達の力ではどうしようもない。取り敢えず7月14日入院の予約をして、私達は悲痛な気持で家路についた。

北海医師が「いつも注射治療をしているデルタクリニックの先生に手紙を書くから早い時期に取りに来てください」と言われたので、3日後の次週の月曜日、6月30日に伺うことにした。北海医師の説明が終わわり、面談室を出た後、口数の少ない真智子は、「一応入院の準備は出来ているから大きな問題はないですが、長期になるとどうするか心配だね」と深刻な状況はあまり表に出さず冷静に言った。

6月29日(日)

真智子は前日の6月28日からあまり食欲がなくなりほとんど何も食べていない。真智子は体が大きいためか、食事の間隔が不規則でもよく耐えられる人で、これまでも午前中食べなくてもあまり苦にしないことがよくあった。真智子はいわゆる狩猟型人種の代表であるのに対し、私は、量は少なくてもあるいは

質は落ちても何時も規則正しく決まった時間に食事を取らなければ済まない人間である。この理由は痩せているために体力が持たないのである。

私はそのような真智子を日頃見ているので、1食位抜くのは私もそれほど気にしていなかったが、「今日はほとんど食べていない、どうしたのか」と聞くと、真智子は「どうも胃の調子が悪く食欲がないの」と言う。「何か食べられそうなものを買ってこようか」と言っても、「その必要はありません」と言うのでそのままにした。

私は真智子の体重などには日頃関心を持ってはいなかったが、真智子のお腹周りがやや大きくなったように感じられたので「腹が一寸ふくれているのではないか、太ったのかな」と聞くと、真智子は「お腹が張った気持で、水でも溜まったのではないかと思う、先日、北海先生に尋ねたのですが問題ないといわれました」と言う。

腫瘍マーカーはこの時点で通常20程度のものが異常に高く15000を超えていた。私は、これはやはり問題であると思い、先週検討した免疫血清治療(活性NK細胞法)をすることを真剣に考えた。

6月30日(月)

真智子はデルタクリニックに車で通院するようになって、通院自体はあまり負担と考えていない。帰りに大きなスーパーのサテイに寄って日常の食べ物などの買い物をしてくるのがお決まりのルートである。今日も真智子はあまり食べてないようであるが、多少しんどい程度で車は運転できると言う。

私は別行動で、武蔵野赤十字病院に行つて北海医師に面会し、先週の6月27日(金)に約束していたデルタクリニクの院長宛の手紙を受け取った。その時、北海医師より報告をうけた。「先日は、患者本人がおられたので、詳しくは言いませんでしたが、片山さんの状況は非常に深刻で、早ければ3ヶ月、長くても半年持つかどうかの状況です」と言われた。

私は「えっ」と思い、私は更に大きなショックを受けた。僅かに、先日と同じように「どうしてこのように早く進行したのでしょうか」と質問するのがやっとであった。北海医師も「私もどうしてこのように進行が早いのか分かりません」と回答も先日と同様である。それ以上は質問することができなかった。私は帰途、どうしてこのようになるまで、私は何も出来なかったのか、しなかつたのか私の無関心を今更のように後悔した。

ところで、このマンションの住んで20年になるが、今日は車を買って初めてマンション内の駐車場に駐車することができる。実は、このマンションの入居時に駐車場の抽選があり幸運にも当選していた。しかし、当時は車を持っていなかったし当分持つ気持もなかつたので駐車場の権利を放棄していた。その後、真智子がデルタクリニクに通院するようになってサニー車を購入したので、駐車場を希望したが、その時は順番待ちが10人以上いるとのこと、仕方なく近くの民間の駐車場を借りていた。今年で6年になる。ところが、運よく順番がやっと回って来て7月から駐車できることになったのである。

しかし、事前に駐車場に駐車はできない規則であると管理人の相原さんが言うので真智子は6月30日の夜、今まで借りていた近くの民間の駐車場からマンションの駐車場に移動した。新しいマンションの駐車場所は管理人室の前のコーナードで一番入れにくい所である。真智子は車の運転が大分上手になった。この狭いところでもバックで入車している。翌7月1日に真智子がマンションの駐車場から病院に行きそのまま帰ることが出来なかつた。結果的に真智子がこのマンションの駐車場に入車したのはこの1回が、最初で最後になった。

## 2. 肝臓癌破裂による緊急入院

7月1日(火)

真智子は今日も依然として食欲なく、実質的に絶食3日目となる。鈍感な私もさすがに心配となりこの日は会社を休みデルタクリニクに同行すると伝える。何時もなら真智子は同行することに反対するが今日は同意した。また、日野先生に会うとも言っているので私も面会することになった。真智子が10年間も通院しているにも関わらず、私が日野医師に会うのは初めてである。通常真智子は午前中に行くのであるが今日は午後にした。かなりしんどいようだったので私が運転すると主張したが、真智子は「お父さんが運転するほうが心配で心臓が悪いんです」といい、自分で運転する。実は私がお父さんが月前に運転したことがあり、駐車場に行く前の狭い道路で対向車を避けるべく車を左によせたが、左の生垣に僅かに接触した。運の悪いことに、その生垣が剪定したばかりであったので切り口が鋭く、微かに触った程